
人 権 尊 重 文 集

春を呼ぼう

2016年1月

第11集



新 宮 市
新宮市教育委員会
新宮市人権尊重委員会

はじめに

新宮市教育委員会 教育長 楠本 秀一

人権作文集「春を呼ぼう」を市内の小・中学校の先生方のご指導とご協力により、発刊する事ができました。

この作文集には、児童生徒が、家族のこと、学校や友だちのこと、平和、社会問題や生命尊重等について、豊かな感性を通して、一人一人の生き方や人権についてしっかりと考えた作品が載せられています。その純粋な感覚は、人権尊重の社会の実現に向けて、確かな希望を与えてくれるものです。

去年は、半世紀に一度のビックイイベントである「きのくに和歌山国体」が開催されました。新宮市においては、高等学校軟式野球と女子サッカーの競技が実施されています。選手達の高いレベルのプレーからは、仲間との関係の中で、目標達成に向かって主体的に練習を重ねてきた選手達の姿を見ることが出来ます。このような選手達の姿は、この作文集の中で児童生徒が述べている、人と人と繋がりの中で人権尊重の社会を実現に向かっていくというとする行動や決意とつながるものがあります。児童生徒には、学校生活の中で、自分の大切さや他人の大切さが認められていることを児童生徒に実感させながら、導いていかなければなりません。

また、今年も、教育委員会の改革の年でもあります。教育委員会は、教育の政治的中立性、継続性、安定性を確保しつつ、責任の明確化、迅速な危機管理体制の構築、首長との連携強化を図ることが求められています。人権教育においては、11月に策定された教育大綱に示されているように、より一層の推進を図らねばならないと考えます。児童生徒が、人権に関する知識を確実に学び深化すること、人権感覚を育成しながら、実践力や行動力に結びつけていかなければなりません。

この作文集をより多くの方々にお読みいただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。
おわりに、この文集発刊に当たり御尽力をいただいた市内小中学校をはじめ関係者の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

★小学生の部★

ありがとう おばあちゃん	王子ヶ浜小学校一年
ゆづき大すき	三輪崎小学校一年
かぞくとえんそく	熊野川小学校二年
わたしのおにいちゃん	高 田小学校二年
小さないのち	神 倉小学校二年
一羽の鳥に教えてもらったこと	三輪崎小学校二年
ぼくの弟	高 田小学校三年
大好きな妹	王子ヶ浜小学校四年
命の大切さ	熊野川小学校四年
おばあちゃん、久しぶりの日本	神 倉小学校四年
命の尊さを知ってください	王子ヶ浜小学校六年
子ども達を助きたい・十一才の夢	熊野川小学校六年
いじめをなくすために	三輪崎小学校六年
思い出の笑顔	高 田小学校六年
平和を壊す戦争	神 倉小学校六年

1 1 1 2 3 3 4 5 5 6 7 7 8 9 10

★中学生の部★

命の尊さ	光 洋中学校一年
思いやり	緑 丘中学校一年
友達について	城 南中学校一年
障害を持っている人について	熊野川中学校一年
平和について考える	光 洋中学校二年
「生きる権利」を守る	近畿大学附属新宮中学校二年
子どもが子どもであるために	緑 丘中学校二年
みんな同じ	城 南中学校二年
「おたく」の人権	近畿大学附属新宮中学校二年
友達	熊野川中学校二年
命の大切さ	高 田中学校二年
「いじめ」という言葉	近畿大学附属新宮中学校二年
さくらんぼの木	光 洋中学校三年
LGBTの人たち	緑 丘中学校三年
戦争	城 南中学校三年
ドナーカード	熊野川中学校三年

11 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

小学生の部

ありがとう おばあちゃん

王子ヶ浜小学校一年



わたしは、おばあちゃんが大すきです。おばあちゃんは、二しゅうかんに一かい、としょかんにつれてつてくれます。わたしが、本がすきだからつれてつてくれます。本をえらんでいるあいだに本をよんでまわってしてくれます。そして、わたしが、「本をよんでもいい。」ときくと、

「いいよ。」

といってまわってしてくれます。おばあちゃんがいままでたくさんつれてつてくれたおかげで本が四十さつぐらいよめました。

おばあちゃんのかみのけは、くるくるです。おばあちゃんは、えいがすきです。わたしといっしょによくいきます。

おばあちゃんはしごとをしています。わたしは、学校からいっもおばあちゃんのいえにかえります。かえるとすぐにしごとちゅうのおばあちゃんにでんわをしてこまらせます。でも、いそいでかえってきてくれます。

ママや、パパがおしごとのときにおばあちゃんのいえにおとうとととまります。いつもやさしいおばあちゃんけどおこったときはとてもこわいです。でも、おいしいごはんをつくってくれたり、かいものにつれてくれるおばあちゃんがわたしは大すきです。わたしとおばあちゃんはさいこうのともだちです。いつまでもげんきでいてね、おばあちゃん。

ゆづき大すき

三輪崎小学校一年



わたしとゆづきは、ふたごです。でも、わたしのほうが、ちよつとはやくうまれたので、おねえちゃんで、ゆづきが、いもうたになります。

いつも、二人は、おなじふくをきたり、いろちがいのふくをきています。だから、みんなに

「どっちがどっちか わからんね。」といわれます。

わたしとゆづきは、たまにけんかするときがあります。一ばんおおいけんかは、わたしが、

「おえかきするから、ゆづきもいっしょにしてよ。」というところ

「ええー、いやだ。オセロしようよ。」

と、ゆづきがいつて、二人でにらみあいになります。

はじめは、二人ともはらがたっているけど、二人のかおが、とてもおもしろすぎて、二人で大わらいしてしまいます。

すると、ゆづきは、

「おえかきしよか。」

と、いつてくれて、わたしは、

「うん。あしたオセロしよね。」

と、なかなかおりします。

そして、二人で、カーペットにねころんで、かおをみあわせま

す。
わたしは、こころのなかで、

(ゆづき大すき。)

と、いったら、こころがあたたくくなります。ゆづきをみると、ゆづきもわたしのかおをみて、にっこりわらってくれました。けんかもいっぱいするけど、すぐになかよくなるし、わたしがこまっていたら、たすけてくれるし、ゆづきとふたごでよかったな。

ゆづきこれからもよろしくね。

ゆづき大すきだよ。

かぞくとえんそく

熊野川小学校二年



一年生のとき、わたしはねつがあつたので学校のえんそくにいけませんでした。たのしみにしていたので、とてもざんねんでした。

でも、べつの日に、お父さんとお母さんが、えんそくに連れていってくれました。かぞくみんな、たなかくじょうへいきました。

たなかくじょうは、かいだんがいっぱいあって、つかれました。だんちの五かいよりも、いっぱいでした。たなかくじょうのてっぺんからとおくを見ると、海が見えました。家もたくさんあって小さく見えました。とてもきれいなけしきでした。

たなかくじょうのてっぺんの広いところでおとうといっしょに走りまわったり、おにごっこをしたりしました。そして、みんなでおかしを食べました。かぞくみんなで食べたおかしがおいしかったです。

学校のえんそくにはいけなかったけど、かぞくでえんそくにいてよかったです。

でも、つぎのえんそくは、ぜったいにいきたいです。

わたしのおにいちゃん

高田小学校二年



おにいちゃんは、おうちで、いろんなことをしてくれます。いつもしてくれていることは、おふろをたいてくれたり、犬のピースケのさん歩に行ってくれたりすることです。わたしが、こまっているとおにいちゃんは、パソコンのつかい方も教えてくれます。いつも、おにいちゃんは、やさしいです。あそんどたのむと、いつもあそんでくれます。おにいちゃんは、わたしという時、いっしょけんめい気分を合わせてくれます。たたかいごっこみたいなあそびばかりだけど、とてもたのしいです。おにいちゃんは、今、高校三年生です。だから、らい年からは、いっしょにごせません。さみしいです。でも今は、おにいちゃんがいるから、さみしくありません。いっしょにすごせるのは、あと少しだけ、いっぱいあそびたいです。家ぞくみんな、どこかにりようにいきたいです。

おにいちゃん、いつもいろんなことをしてくれて、ありがとう。ゆいは、とても、うれしいよ。

小さいのち

神倉小学校二年



ぼくの家に来ました。ペットショップで見つけたかわいい文鳥です。

生まれて、まだ一か月しかたっていません。体の色は、まっ白です。名前は、「ピロ」です。おなががすいた時、ピーピーなくので、おとうさんがピロとつけました。

ぼくは、ピロが来た時、とてもうれしかったです。まい日ちゃんとおせわをして、大じにそだてようと思いました。

ピロは元気で、よく食べて、いっぱいうんこをしました。えさをあげたり、鳥小やのそうじは、家ぞくみんなでしました。

足だけ水あびしたり、家の中でとぶれんしゅうをしたり、みんなピロを大じにそだてていました。

ピロが家に来て、一か月ぐらいたった時、ピロは、きゆうにねつを出しました。びょういんにつれて行って、くすりをもらったけど、ピロは、のまなかったです。くるしそうで、かわいそうでした。

ある日の夜、ぼくがねている間に、ピロはしんでしまいました。おかあさんが、

「ピロは、くるしそうに、口をパクパクしながらしんでしまったよ。」

と、なきながら言いました。ぼくは、かなしかったです。だって、ピロは、ぼくの大せつな家ぞくだから。六人家ぞくが、五人家ぞくになってしまつてさびしいです。

ピロは、元気だった時は、フワフワで、さわると気持ちよかつ

たけど、しんでしまったピロは、かたくて、つめたかったです。かわいそうで、なみだが出ました。そして、ピロとあそんだことをいっぱい思い出しました。きつとピロも、ぼくのことをわすれないでいてくれると思います。ぼくも、ぜったいにわすれません。

もし、また文鳥をかつたら、元気で長生きできるように、いっぱいあそんで、一生けんめいおせわをしたいです。小さいのちを大切にしたいと思います。

一羽の鳥に教えてもらったこと

三輪崎小学校三年



ぼくが、まだ保育園のころのことです。お母さんと帰っていた時、道ばたに一羽の鳥がぐったりとたおれていました。びっくりとせず、全く動かなかったので、鳥が死んでいることに気づきました。でも、生き物が死んでいるところを時々見たことがあったので、この時はあまり気にしませんでした。

それから三年、ぼくは小学校三年生になり、学校で「ちいちゃんのかげおくり」を学習しました。まだ小さいちいちゃんやんが、せんそうで、ひとりぼっちになって、命が空に消えてしまうという物語でした。ぼくは、この学習をして、命について深く考えることができました。

命は、とても大切なもので、命がなくなってしまうことは、とてもかなしいことです。命が消えてしまう「死」を考えた時に、あの時に死んでいた一羽の小さな鳥のことを思い出しました。ぼくは、あの時、なぜ死んでしまった鳥を見て何も思わなかったの

だろう。死んでいる生き物を見て何も思わなかった自分がいやになりました。

どんな生き物にも、人間にも、命は一つしかありません。たった一つの大切な命です。どんな小さな生き物にも命があり、みんなぼくたちと同じように一生けん命に生きています。ぼくは、あの時の小さな一羽の鳥に命の大切さを教えてもらいました。

ぼくは、命を大切にして、これからも一生けん命生きていきます。

ぼくの弟

高田小学校三年



ぼくには弟がいます。名前は、あおいといい六才です。

あおいとぼくは、一日一回はけんかするけど、すぐになかなおります。どのようなことでけんかをするかというと、かたづけをするかしないかや、ぼくの物をかしてあげなかったりすると、すぐすねるのですが、あやまつたらすくなかなおりできます。

あおいとなかよしの時は、そんなにないですが、遊ぶ時やバスケの練習の時は、なかよしです。

でも、あおいには、いいところがたくさんあります。それは、とてもしようじきなところですよ。友だちに、いやなことをしてしまつたときも、お母さんにきちんとほうこくしていました。ふだんは、元気に外で遊んでいるあおいだけど、たまにおとなしいときもあります。本を読んだり、絵をかいいたりしてしずかにしているの、「いがいだな。」と思うこともあります。

ぼくが一番すごいと思うのは、とても勉強ずきでがんばりやの

ところですよ。ぼくは、どちらかというと勉強がにがだから「すごいな。」と思います。

ぼくは、あおいがいてくれて、けんかをするけどいっしょに遊べるからとても楽しいです。これからもいっしょに遊んだり、バスケの練習をしてなかよくしていきたいです。

大好きな妹

王子ヶ浜小学校四年



わたしには、二つ年下の妹がいます。わたしは妹のことが大好きですが、妹はわたしのことが本当に好きなのか分かりません。たまにいやなことを言ってきたり、けんかすることがあるからです。

ある日、わたしは妹と二人で遊んでいるときに、気になっていた事を妹に聞いてみました。

「本当にわたしのこと、好き。」

すると、妹は、

「大好きだよ。」

と言ってくれました。わたしはすごくほっとしました。

でも何日かたつて、妹と二人で宿題をしているときに、ちよつとしたことが原因でけんかをしてしまいました。そうすると、妹は、

「大っきらい。一生遊びたくない。」

と言つてきました。わたしは、すごく悲しくなりました。あのとき「大好き」って言ったけど、「大っきらい」と言われたので、本当はきらいなんじゃないのかな、と不安になりました。

また何日かたって、今度は、妹に、
「けんかの時はきらいって言ったけど、本当　にきらいなの。」
と聞いてみました。すると、妹は、

「本当は好きだけど、けんかをしたときははらが立って、つい言っ
てしまっただけ。」

と言いました。わたしは、前よりもほっとしました。妹は、けん
かが原因で大きらいと言っていたので、次から、妹がきずつくよ
うな言葉は言わないで、妹の気持ちを大事にしてあげよう、と思
いました。

今でも、わたしは、そのことを心にかけていますが、どうしても、
つい言ってしまうときがあります。そのときは、ちゃんとあやま
るようにしています。

自分がなやんだからこそ、他の人をきずつけてはいけない、相
手の気持ちを大事にしよう、と心がけて、家族や友達とすごして
いこうと思いました。

命の大切さ

熊野川小学校四年



昨年、お母さんの知っているおばあさんが亡くなりました。安
らかな顔でした。そのおばあちゃんは病気でした。なんの病気が
は知りませんが亡くなりました。ぼくは、安らかな顔を見ていて
「命の大切さ」に気づきました。

自分は「生きたい」と思っても病気で生きられない人がいるこ
とに気づいて初めて「命のありがたみ」を知りました。それは、
「人間には命が一つしかないからその命を大切にしないといけな

い」ということです。

自分はなぜ命の大切さに気づいたのだろうと考えました。いま
で、亡くなった人のことを見たことがなかったから初めて気づい
たのかもしれない。

これからは、自分の命を大切にしていこうと思いました。もし、
友だちに危険なことをするようにさそわれても、きっぱりとこと
わろうと思います。ぼくと同じようにみんなにも「命の大切さ」
に気づいてほしいと思いました。

おばあちゃん、久しぶりの日本

神倉小学校四年



ぼくのおばあちゃんは、フィリピンに住んでいます。今年の夏
休みに日本にきました。ぼくは、おばあちゃんと会うのは二年ぶ
りでした。だから、おばあちゃんに会ったときは、うれしくてう
れしくてなきそうになりました。

おばあちゃんとぼくとは、ほとんど言葉が通じません。おばあ
ちゃんは、「こんにちは」や「ありがとう」ぐらいしか知りませ
ん。ふだんは、フィリピン語を使っているからです。ぼくは、日
本語を使います。だから、おばあちゃんと話をするとき、ぼくは
いろんな動作をしています。おばあちゃんに伝わったとき、おばあ
ちゃんはにっこりわらってくれるので、ぼくはうれしくなります。
おばあちゃんが、おるすばんをしてくれるときは、せんたくや
おそうじをいつもしてくれています。おばあちゃんがいることで、
ぼくたちはとても助かっているの、ぼくは、おばあちゃんに、
「ありがとう。」

と言いました。すると、おばあちゃんは、やさしくぼくにわらってくれました。

おばあちゃんには、病気があります。でも、朝早くから起きてごはんを作ってくれたり、ぼくたちの服をたんでくれたり、ぼくたちが住んでいるマンションの押し入れを、何日もかけて直してくれました。ぼくは、おばあちゃんに、「ありがとう。」の気持ちでいっぱいになりました。

でも、おばあちゃんがフィリピンに帰る日がきました。ぼくは、悲しかったけど、おばあちゃんのために、いっしょうけんめい帰る準備を手伝いました。

おばあちゃんを見送るために、空港に行きました。いっしょにお昼ごはんを食べているとき、ぼくは心の中で、

「おばあちゃんとおわかれか。また、いつ会えるのだろう。」と思いました。

おばあちゃんが、飛行機に乗るときがきました。ぼくは、妹といっしょに、

「ばいばい、おばあちゃん。元気でねえ。」

と言って、手をふりました。おばあちゃんは、

「聖地、あいな、またね。バイバイ。」

と言いました。

ぼくと妹は、なきながらおばあちゃんが見えなくなるまで手をふりました。

フィリピンは、毎日が暑いです。だから、おばあちゃんの家にはせんぷうきが何台もあります。おばあちゃんは病気だから、日本に来たときみたいにいっぱい働くと、病気がもっと悪くなってしまう。おばあちゃんは、フィリピンの役場のようなところで働いています。家族もたくさんいるから、大変だと思います。ぼくは、おばあちゃんがあまり働きすぎないで、いつまでも元気

でいてほしいと思います。

そして、ぼくはおばあちゃんみたいに、人のために少しでも役に立てるように、がんばりたいです。

命の尊さを知ってください

王子ヶ浜小学校六年



最近、何の罪もない人が殺害されているニュースをよく見ます。それも、恋人がじゃまになつたから、泣き声がうるさかったからなど、「本当にそんな理由で？」と思うようなものが多いです。どうして何の罪もない人の命を、そんなに簡単にうばってしまったのかと、いつも不思議に思います。

私は、出産がテーマになっているドラマやニュースを見るのが好きです。そこでは、生命のたん生の尊さや生まれてくることの奇跡が取り上げられています。そのようなテレビを見るたび、「生まれてくるということは、本当にすごいことだ」と感じるのです。それなのに、せっかく生まれてきた大切な命を、ただ「にくいから」とか「じゃまだから」という、身勝手な理由でうばってしまうのは、本当に許せません。

そこまではいかなくても、普段の生活の中で、「死ね」や「消えろ」といった言葉を、軽い気持ちで使っている人がいます。それは決して軽々しく使つてはいけない言葉だと、私は思います。なぜなら、人の命の重さを考えれば、じょう談でも声に出して言える言葉ではないからです。

私は、どうすればみんなが命を大切にするようになるのか考えてみました。それにはやはり、「命の大切さ」を学んでいくこと

が大事だと思うのです。

先日、学校に助産師さんが来て、赤ちゃんが生まれるまでの話を聞かせてくれました。その中で、私達が生まれるまでにどれだけの愛情をもらっているかということや、初めは0・13mというとても小さな赤ちゃんの卵が、どんどん大きくなっていくこと。そして、命がたん生すること自体が奇跡的なことだと知りました。また、生まれるときは、自分で回ったり方向転換をしたりしながら、自分の力で生まれてくることも学びました。

小さなころから、学校や家庭で、命について勉強したり、話し合ったりすることによって、おたがいを思いやり、大事にし、尊重し合えるようになるのではないかと思います。そうすれば、いじめや差別もなくなり、さらには命のうばい合いもなくなるのではないのでしょうか。

うばってもいい命などありません。命の重さもみんな同じです。そのことを世界中の人が分かってくれたら、今世界で起きているような無差別テロもなくなるはずです。

いつか世界中の人々が、平和で幸せに生きていけるようになってほしい。そのためにも、一人ひとりがもっと真剣に、命の尊さについて考えてほしいと願っています。



子ども達を助きたい・十一才の夢

熊野川小学校六年



ぼくは、最近あるテレビ番組を見ました。それは、「そんなところに日本人」という番組です。この番組は、海外のいろいろなところに住んでいる日本人を調査する番組です。その番組に、ある日本人の女の人の話が出てきました。それは、その女の人が世界一暑い国に住んでいるということです。ぼくは、なぜそんなところに住んでいるのか不思議に思いました。「そんなに暑い国なら日本に住めばいいのに」と思いました。でも、その女の人にはある理由がありました。それは、その女の人がまだ十一才の時にユニセフのコマーシャルを見たそうです。それは、まずしい生活やいろいろな病におかされた世界の子どもの写真だったそうです。そのコマーシャルを見て、「私はこんな子ども達を助きたい」と思ったそうです。ぼくは、この話を聞いて、すごいと思いました。なぜかという、まだ十一才の時にこんなことを考えたからです。そして、その女の人は、成長するにつれて、子ども達を助きたいという気持ちだんだん強くなり、看護師の免許をとりました。そして、まずしい国や医者がすすんでいない国に行き、手助けをするグループに応募しました。それで指名されたところが、世界一暑い国だったそうです。その国は、まずしい人ばかりが暮らす国で、冷たい水は出ないし、クーラーがないなどのきびしい生活ばかりです。しかし、その女の人は、この国でがんばって看護師の仕事をしています。

この国には、ある大きなやはり病があります。一つは、おなか

が異常なほどふくらむ病気です。この病気の原因は栄養不足だそ

うです。もう一つの病は、骨がうきあがるほどやせほそる病気です。この病気は、産まれたころは母乳を飲みますが、大きくなるにつれてほ乳びんなどで飲みます。そのほ乳びんはまずしいため買えず、母乳をあげようとしても母親も栄養不足であげられず、このような病気になってしまうそうです。この二つの病気のもと、やはりまずしい生活からの栄養不足です。ぼくは、このことを聞き、すごくかわいそうだと思いました。彼女は、その人達を助けるために栄養をたくさんたくわえた葉をもった植物を一人で一生懸命育てているそうです。そして、今も世界一暑い国でいろいろな病におかされた子ども達を助ける仕事をしています。今、この地球にはたくさんの人々が住んでいます。でも、その全員が豊かに暮らしているとは言えません。ぼくは、まずしい子ども達を助けるために、何かできることはないか考えています。

いじめをなくすために

三輪崎小学校六年



私はいじめのない社会にしたい。そのためにまず、いじめのない楽しい学校にしたい。みんなが楽しく過ごすことのできる学校、そういう学校が増えていけば、いじめが減っていくと思う。

私がいじめのない社会にしたいと思ったのは、家で、新聞やテレビでいじめの事を見るようになったからだ。それらは、いじめられた人達が、つらい気持ちになり、学校に行けなくなったり、時には自殺をしてしまったりすることを伝えていた。私はたった一つしかない大切な命を失うことにもつながるいじめを、絶対に許してはいけないと思った。

ただ、「楽しく過ごすことのできる学校」にするには、どうすればいいのか。難しいことだと思う人もいるだろう。確かに簡単なことではないかもしれない。でも、みんながおたがい笑顔で向き合うことで、楽しい学校にしていけると私は思う。

では、どうすれば、笑顔で向き合えるようになるのか。私は、いじめの事件を伝えるテレビ番組を見る一方で、「いじめをノックアウト」という番組を見た。それは、いろいろな学校の生徒たちがいじめについて話し合ったり、いじめられた人たちの気持ちになって考えたりする番組だった。それを見て私は、みんながいじめのことを真剣に考え、相手の気持ちになって行動することで、笑顔で向き合える楽しい学校になっていくと思った。私たちの学校でも、児童会の努力点に「友達を一人にせず、思いやりの心を持つ」というのがある。私たちもこの努力点を守っていくことが大切なことだと思う。

また、いじめが起らないようするだけでなく、もし、いじめられている人を見たら、それを止められる勇氣も必要だと思う。私たちはその勇氣で、つらい気持ちでいる人を明るくすることができのではないかな。

私は楽しい学校が増えてほしい。でも、そのためには、私もみんなもいろいろと努力をしていかなければいけない。そうすることがいじめが減り、いじめがないよりよい社会、未来につながっていくと思っている。

思い出の笑顔

高田小学校六年



ぼくのひいおばあちゃん、平山順子さんは三重県の病院に入院しています。

十一月七日、車で病院に行くときになぜか、ぼくはひいおじいちゃんのことを思い出しました。

ぼくのひいおじいちゃん、平山としおさんは、とてもやさしい人でした。

ぼくが保育所にいたときに、むかえに来てくれたり、ひいおばあちゃんと三人で散歩に行ったりしました。ぼくにとって、とても楽しい時間でした。

お母さんにひいおじいちゃんはどんな人だったのか、聞いてみました。お母さんは、

「本当にやさしい人だったし、困ったときに助けてもらったりしたんだよ。」

と言っていました。ぼくだけじゃなくて、家族みんながひいおじいちゃんはやさしかったということを感じているんだなと思いました。

楽しい思い出もたくさんあります。だけど一番悲しかったことは、ひいおじいちゃんが亡くなったことです。ぼくが一年生のときでした。ばあちゃんもお母さんも、みんな泣いていました。ぼくは何が起きたのか、そのときは分かりませんでした。ただ、みんなにとって悲しいことが起こったんだということだけは分かりました。

ぼくはひいおじいちゃんにいろんなことを教えてもらいました。

例えば、ぼくの名前の「颯斗」という漢字を覚えてもらったり、ひいおじいちゃん、おばあちゃんの三人で丸山公園に遊びにいったこともよく覚えていています。でも、今思うと、ぼくはひいおじいちゃんに何もかえせていません。また、ひいおばあちゃんは病院に入院していて、ねたきりになっています。今のぼくにできることは、ひいおばあちゃんに声をかけてあげることだと思います。病室に入り、ベッドでねているひいおばあちゃんに、

「早く元気になってね。」

と声をかけました。ねむったままだったけど、ぼくの声がひいおばあちゃんに届いてくれたらうれしいなと思いながら、声をかけました。

ぼくがひいおじいちゃんといっしょにいた時間は、とても短いです。だから、お母さんとか他の人に比べると、思い出も少ししかありません。だけど、ぼくは今でもはつきりとひいおじいちゃんの顔を覚えています。ぼくといっしょに写っているひいおじいちゃんの写真を見ると、やさしい笑顔からぼくはたくさんの愛情をもらったんだということに気が付きました。

ぼくが将来、大きくなって、お父さんになったとき、ひいおじいちゃんに負けないくらいにやさしさを周りの人を笑顔にしていきたいです。

平和を壊す戦争

神倉小学校六年



世界で戦争が無くなる。平和な暮らし。もしこれが実現したら、世界はどれだけ平和になるのだろうか。そのためには、広島や長崎の被爆建造物を、そのままの形で残し続けることが、戦争がない平和な暮らしへの第一歩だと考える。

今年の夏休みに、テレビで戦争のドラマを見た。そして、そのドラマが、お母さんが子供のときには毎月流れていたことを知った。そのドラマを見た時に、「今は平和だな。」と改めて思ったし、この平和を守ろうと思った。平和を守るためには、戦争をしないためには、他の国ともめ事を起こさないこと、他の国と仲良くすること、被爆建造物を残すことが大切だと思う。

ただ、仲が悪かった国と、急に仲良くなろうなんて無理だと思う人もいるだろう。確かに、急に仲良くなるのは無理かもしれない。だが、戦争をしない方法ならある。広島と長崎に原爆が落とされたから、原爆ドームみたいな建物はまだ他にもあると思う。建物だけじゃなく、爆風で木が少しなかったりするものもあると思う。ただ、それを残すには、お金が数千万円もかかってしまったり、戦争を思い出していやだという人もいるだろう。まずお金に関しては、数千万円で何万人もの人の命が、助かるのだったら安いと思う。お金がいっぱいあったら、ダイヤでも何でも買えるけど、人の命は何億あっても買えない。それに比べれば、建物を残すお金なんて安いと思う。

もう一つの、戦争を思い出すという意見に関しては、戦争を知っている人は、おそろしさを知っている。しかし、平成生まれや、

昭和の最後に生まれた人は戦争のおそろしさを知らない。原爆ドームを残すと、未来が少しでもいい方向に行くと思う。戦争を知っている人には、戦争の恐ろしさを伝える役割もあると思います。現在戦争をしている国が終戦し、貧しい国には豊かな国があらゆる面でサポートをすると、日本だけではなく、世界が平和になると思います。戦争のない平和な国とはこのことだと思う。



中学生の部

命の尊さ

光洋中学校一年



人権と聞いたときに、私がまず思い浮かべたのは、子どもの人権だ。

近頃、「児童虐待」という言葉をよく耳にするようになった。テレビでは、悲しいニュースが繰り返し伝えられている。実は、ここ数年で虐待で亡くなる子どもは年に百人前後もいるそうだ。私はそのことを知り、とても驚いた。それと同時に、虐待を防ぐためにはどうしたらいいのか、考えなければいけない問題だと思った。

そもそも、虐待は、暴力や暴言などで相手の生命、生活、人権をおびやかすことをいう。人権は、誰もが生まれながらに持つ、「幸せに生きる権利」だといえる。「誰もが」持っているのだから、子どもも、赤ちゃんも持っていることは、言うまでもない。その大切な人権を侵害され、心に大きな傷を負わされると、どういう気持ちになるだろうか。それも、大好きなお母さんやお父さんに私なら、絶対に耐えきれない。想像しただけで、胸が張り裂けそうになる。

しかし、そんな虐待が行われているのが現状だ。虐待は、上下の力関係が明らかで起りやすい。そのため、子どもが自ら被害を訴えたり、逃げだしづらい場合がある。そんな子ども達を助け、虐待を防ぐため、十五年前に「児童虐待防止法」が作られた。私は、このことを聞き、「よかった」と率直に思った。な

ぜなら、この法ができたことで、守られた命がたくさんあると思うからだ。しかし、十六年前までに守れた命がたくさんあったと言え換えることもできる。守れなかった命の分、今後、たくさんの子どもを守るようにならなければいけないと思う。

傷つけられる子どもがいる一方で傷つけてしまう親の気持ちはどうだろう。自分の命ともいえる大事な子どもを傷つけてしまう。普通は考えられないことだ。でも、その背景には、その親もまた子どもの頃、同じように虐待をうけていたという悲しい連鎖があるという。そこに育児の知識不足による不安や疲労、孤立感、経済的困窮などが重なる。これを聞いてとても胸が痛んだ。大人も最初から完璧な人間ばかりではないのだから、家族や地域の支援が必要なのだと思う。自分が大人になった時、悩み苦しんでしまつたらまわりの人に助けを求めよう。そして、まわりの人も苦しんでいないか心配りできるよう、アンテナをはれるようになりたいと思う。

七月に、学校で和歌山市生活指導補助員の方の講演会があったことを思い出した。生活指導補助員という仕事があるのを初めて知った。いろいろな生徒と関わりを持つ方の話の一つ一つに大きな衝撃をうけた。その最も大きな理由は、多分、年が近いという点だと思う。実際、「同じくらいの年の子が苦しんでいる」と思うと、その子の気持ちになったように苦しくなった。どこか遠いところの話という感覚でしかなかった、虐待。しかし、同じ県内の話を聞くと、私の中でとてもリアルなものになった。そして、みんながみんな、幸せに暮らしているわけではないと思ひ知らされた。今、私は、毎日学校に行き、勉強に励み、クラブ活動をし、友達と笑いあい、家庭ではあたたかい食事をする。あたり前だと思っていた暮らしが、実はとても幸せなのだと改めて思った。目の前にある幸せに日々感謝し、まわりの人を大切に、そして自分

も大切に生活していきたいと思う。悲しい思いをする人が一人もいなくなる、そんな社会になるように小さな力かもしれないけれど、集める時だと思う。

思いやり

緑丘中学校一年



最近、高齢者の介護サービスで、介護士が高齢者の人をいじめていたということをニュースで聞いたことがあります。その介護士たちは、高齢者の人を「トロイからムカツク」とか、「失禁するからイヤ」などといった理由で、いじめていたらしいのです。

私はそのことを知り、とても腹が立ちました。しかし、後になって冷静に考えてみると、自分自身も祖母を大切にすることがあまり無かったなあと思いました。高齢者の人々が今の日本の社会を支えてきたのですが、最近の一部の若い人達はそんなことを考えたこともないのではないかと考えました。皆さんは高齢者の人達をどう思っているのでしょうか。確かに、私はお年寄りの人に対してあまり親切にしていませんでした。でも、やっぱり同じ人間として助け合いは必要だと思おうし、自分が、年をとったときのことを考えると、やはり考えなおさなくてはとも思いました。

また、前、私は足にひびが入ってしまい、一時的ですが、介助を要したときがありました。松葉づえをつかなければ歩けず、二階にも一人ではあがれず、風呂も一人では入れない状態でした。しかし、私の家族は、ちゃんと風呂に入れてくれたり、手をかしてくれたりしました。その時は、家族のあたたかさを感じました。他にもいろいろとケガや病気をしてきましたが、その度に家族や

友人達に助けてもらってきました。誰もが人の助けがいるような状態になったときのことを考えたら、しんどくても、お年寄りや体の不自由な人を助けられると思います。人は、自分に例えて考えて、自分がいやだなと感じることがあれば、人にしない。そんな風にしていくことが思いやりの第一歩であり、それ自体が人を助けているのではないかと思います。また、自分が生きていく中で、必ず他の人の助けが必要になるはずです。助けてもらったら、その分、他の人を助ける。そんな助け合いのサイクルができていいと思います。

しかし、そんな簡単にうまくいくわけがないと思います。人はそんな完ぺきにできていないと思うからです。人を助けることより自分を守ることのほうが大切だったり、裏切ってしまったりと、よくあることでもそんなことをしてしまう弱い心が人にはあると考えています。そんな中でも、人を助けたいと思う人はすごいと思うし、その思いを人に伝えていくことが大切だと思います。もちろん私も、自分の身を守ることが一番大切です。それでも人を助けたいという気持ちもあります。人にはどこかに、良心が必ずあるのだと思います。それでも、人を助けることは難しいことだと感じます。それならば、ちよつとした親切をいつも心がけてみる。そんなことをしてみたらどうでしょうか。席をゆずることは当然親切なことだし、いつも笑顔でいることも親切なことだと考えています。そんな親切を心がけていけば、少しずつ人を助けることがあたり前のようになっていくんじゃないでしょうか。少なくとも、私はそう強く思っています。

友達について

城南中学校一年



私は、最近思うことがあります。それは、友達の話信じていいのかと、いう事です。うそをつく友達の話の話を聞くと、「そんな子なのかな。」

と、少し疑ってしまう事がありますが、その話を、いろんな人や友達など、多数の人から同じような話をよく聞いてしまうたびに、「やっぱり、そんなふうには、うそをつく子なんだな。」

と、ほんの少しの思いが、本当の姿が、うそをつく子という人物に、いつの間にか、変わってしまったていました。いつも不安定な自分が、たった多数の人の言葉で、心がゆれていても、いいのでしょうか。ふと、自分で我に返ってみました。今まで、遊んだり、助けてくれたりしてくれていた友達を簡単に、裏切ってしまった自分が、今振り返ると、そこには、あの時、話をしていた多数の人達も、誰も、とたりにはいない事が、ようやく分かりました。私は、いったい誰を信じて、誰の話をそらして信じないでいれば良かったのでしょうか。私は、悩み始めました。

「やっぱり、うそでも本当でも、いつでも、そばにいてくれた、大切な友達を、信じていてあげれば良かった。」

私は、心の中で、そう思いました。だけど私は、友達ではなかったのです。ずっと、ついていくだけで、ただ涙がこぼれつらくなった時支えてくれていたけれど、それなら、昔私が泣いてしまった時、いじめていた人達が少し手をさしのべてくれた時と同じ事に気がつきました。

「だったら、あの時いた友達とと思っていた人は、本当は、なんだ

ったのだろうか。」

私は、また悩んでみました。私は、だまされていたのかもしれないと、後々気付きました。確かに、一人になつてしまった私を、放っておいていた友達。私は、利用されていたただただ、あつてなく友達と思われていた人に、利用されていたのです。それからというもの、少したった今では、友達がいるからとか、その言葉を聞いて、少し心配になつてしまいますが、もしも、その子を助けて、もし前の時のように、その助けた子にだまされたら：と思うと、やっぱり、無視をしてしまうかもしれません。だけど、そんな弱い自分がいたら、私よりも、もっと悲しんでいてつらいと思つているかもしれない人達が、この学校でも学年でも、少ないかもしれませんが、いるかもしれません。自分は、悲しみを知つた時は、誰もいませんでした。だからこそ、そんな私のように、私以上に悲しんでいる人や、つらい思いをしている人を、助けてあげたいです。そして、学校へ来ていない人も、います。その人の中には、私の友達だった子もいました。ずっと、かかえこんでいるのかは、分かりませんが、私の何十倍というくらいに、かかえこんでしまつていいると思います。だけど、きつと、その子が、いつか学校に再び来てくれる事を、ずっと待つている友達がいます。きつと、その子が、学校に来て、楽しい学校生活をおくつてくれると信じてくれる先生がいます。その事を気付いてくれると信じている私がいいます。こうして、昔、友達だった子を心配している自分は、利用されて、くやしくて、きらいかもしれないけれど、ほんの少しだけでも、助けてあげたいという願いを行動に、うつしていたのかもしれない。けれど、自分は、助けるのではなく助けてもらったので、次は、助けたいと思いました。自分の出来る限りの事は、してあげたいし、もっと仲の良いクラス・学年にしたいです。

障害を持っている人について

熊野川中学校一年



障害といっても色々な障害があります。例えば、ダウン症や視覚障害、言語障害などがあります。私は五、六年生ぐらいの時はまだ障害とはどういうことなのかあまり知りませんでした。でも、この作文を書くにあたって、障害のことを考えました。例えば、視覚障害を持っている人は失明していたら何も見えません。そういう人の中には杖をついて歩く人もいます。目が見えない人達のために点字というものがあります。スーパースターのエレベーターなどに書いていることがあります。点字も勉強しないとわかりません。私は目が見えて耳が聞こえます。それが当たり前だと思っていました。でも考えてみれば、そうではないんだと思いました。もし急に目が見えなくなったらと考えてみると、すごく怖いし、そうなることは想像もできません。だから、目が見えない人はすごく大変なんだなと思いました。

私は、あるテレビで耳が聞こえない子の話を見ました。その子は障害を持っていて、せいじめられたと言っていました。私はそれを聞いて、障害を持っているからといって格差をつけてはいけないと思いました。けれど実は私は最初障害を持っている人には少し抵抗がありました。けれども、もし自分が障害を持っていたらと考えると、格差をつけられたらいやだと思うので、障害のある人に格差をつけてはいけないと思いました。私は、障害を持っている人はどうしてあんなに前向きでいられるのだろうと思います。私はポジティブというよりネガティブなので、障害をもっていてあんなに前向きに生きていることがすごいと思います。私な

らたぶん絶望していると思うからです。障害を持っている人は命ある限り今自分ができることを一生懸命しているような気がします。なぜでしょうか。障害のない私達よりも障害を持っている人達の方が希望を持っているような感じがするのです。少し不思議です。障害を持っている人は自分の障害としっかり向き合って前向きに生きているのでしょうか。私はそのことをとてもすてきなことだと思います。

平和について考える

光洋中学校二年



私は最近、よく戦争についてテレビで見たり聞いたりします。そんな番組を見てみると、戦争の恐ろしさがすごく伝わってきます。そこで私は、平和について考えてみました。

一九四五年八月十五日、天皇の玉音放送により戦争が終わりました。それ以来、日本は平和国家として歩んできたのです。長く続いてきた戦争を断ち切った日本。しかし世界では、今だに戦争をしている国がたくさんあります。そのため多くの人々が命を落としたり、けがをしたりしているのが現状です。私は日本だけが平和でもうれしくありません。世界の全てが平和になることが、私の望みです。そうすれば皆が幸せに暮らせると思うし、殺人事件や強盗、テロなども少なくてできると感じたからです。戦争はささいなめ事で始まるものと、私は考えています。一人ひとりが相手を思いやる心を持てば、自然と争い事は起こらなくなるはずです。思いやる心を育てることが、この世界の課題ではないでしょうか。

しかし平和国家であるはずの日本も、最近は何騒な事件がたくさん起こっています。それに『安保法案』が閣議決定された事で、集団的自衛権の行使が可能になるうとしています。私は以前から、集団的自衛権には反対でした。せっかく今日本は戦争に関わっていないのに、この自衛権が使えるようになってしまつては、戦争に関わるという事になってしまいます。それでは平和にはほど遠くなると思います。私達に、平和国家を守るためにできることはないのでしょうか。

テレビではよく、学生などの若い世代が自ら積極的に抗議デモに参加している姿が映っています。私は若い世代は、あまり戦争に関心を持たないイメージがありました。しかしそれは、大きな誤解でした。今の若い人々も、ちゃんと戦争について考えているのです。皆それぞれ自分の意見をちゃんと持っているのです。それはとても良い事だと私は感じています。これからの日本を引っ張っていくのは若い世代なのですから、自分の持っている意見をしっかりと言うことが大切になります。

戦争の体験者から話を聞くことも、よい経験になると思います。実際私の祖父も、戦争に行つたのです。ですが終戦から七十年。戦争をしていた時代に生きていた人は、少なくなりつつあります。テレビなどでも最近、戦争の体験者に話を聞き、戦争について考える番組をよく目にします。そうやって、戦争の残酷さを次世代に語り、伝えていくのはとても大事な事だと思いました。

平和についていろいろと考えてきましたが、一番の課題になるのは、やはり『戦争』です。戦争をなくせば世界は平和になり、幸せになれる。誰もがわかる事だと思うのですが、そう簡単にはいきません。しかし皆で力を合わせれば、決して不可能ではないでしょう。不可能を可能にし、永久に平和な世界を創ることができればうれしいです。そのために私ができることは、思いやりの

心を持つことです。思いやりで溢れた世界になれば、きっと平和は近くなると私は考えています。

「生きる権利」を守る

近畿大学附属新宮中学校二年



私の祖父は、六年前に急性骨髄性白血病（AML）になりました。私が初めてそれを聞いた時は、とても驚きました。あんなに元気だった祖父が、どうしたのだろうと思いました。

それが発覚したのは、祖父の職場の健康診断の血液検査でした。そして、骨髄移植をしなければ、血液をつくることができなくて、やがては死んでしまうことも分かりました。

祖父は、ドナーと言われる、骨髄液の提供者を探すことになりました。普通は、兄弟が一番ドナーに適しているのですが、祖父には兄弟がいなかったのです。全国から探さなければなりません。しかし、五年前には、コンピュータでドナーを探すことができたようで、血液の六個の型がすべて合う人が全国に十数名いることが分つたそうです。

血液センターの担当の人が、その一人ひとりに移植をお願いしていったのですが、一人、二人と断られました。というのは、ドナーとして登録してから高齢化されたり、病気になるれたり、仕事で休みをとることができなかつたりする人が、登録者の中におられたからです。一人、二人と断られていくと、きっと祖父はとても不安だったと思います。

もし、私が祖父のように移植をしなければ、死んでしまうような病気になつてしまつたら、自分では予想がつかないほど、不安

だと思えます。また、もしドナーになってくれる方が見つからなかったら、と思うと、考えられません。

祖父は、移植以外にも、無菌室に入って放射線療法や、抗癌剤治療を受けたそうです。食事制限もかかって、おさしみや、サラダ、大好きな漬物も、梅干しも食べられずにいたそうです。食べられたのは、火の通った食べ物と、密封状態で、菌のないアイスクリームだけでした。さらに、治療のストレス、薬の副作用、菌があつてはいけないので、料理の味は全くなかったそうで、食欲もなく、どんどん弱っていったそうです。私は、祖父がこんなにも苦しい思いをしていたのだということを、知ることができました。祖父は、入院前と比べ、十キロ以上やせたそうです。

やがてドナーになってくれる方が現れて、大学病院で移植をしていただきました。ただし、骨髄をくださる方、ドナーの方が誰なのかということは一切教えてもらえないので、どんなに感謝しても、その人に直接言うことはできません。自分が誰を助けたのか、自分が移植することで、相手が、祖父が助かったのか、助からなかったのかも分かりません。そんな中、ドナーの方は、この誰か分からない祖父のために、一歩間違えれば命を落とすかもしれないとわかっていながら、ドナーになることを決意してくださったドナーの方に、私も祖父母も、家族全員、本当に感謝しています。もし、ドナーの方がいなかったら、祖父は、この世にいなかっただろうし、もちろん、現在のように一緒にご飯を食べたり、買い物に行ったりすることはできませんでした。

私は、改めて、家族のありがたみを、感じることができました。そして、人権作文というと、「いじめ」についてや、「差別」などのテーマをよく聞きます。しかし、人間誰しもが持っている、「生きる権利」を、病気で妨げられようとしたのを、助けてくれたのがドナーの方でした。そういう、人権の守り方もあるのだな

と知ることができました。祖父に、再び「生きる権利」が戻ってきたことを、私は心から嬉しく思います。

子どもが子どもであるために

緑丘中学校二年



私は、沖縄の戦争について調べ学習をしたり、国語で「小さな労働者」という文を読んだりして、この内容の人権作文を書くことにしました。

沖縄の戦争で学んだことは、自分と同じ年代の中学生が、今では考えられない仕事をしていたことです。

男の子たちは、武器を持って戦場へ行き、戦い続けました。相手のほうが有利な戦いのため、たくさんの中学生が亡くなりました。相手は大人で大人数だから、すごく怖かったと思います。

女の子たちは、戦いでケガをおった人たちを治療しました。医療の知識がないのに手術をしたり、ますいが無いため「痛い」と叫ぶ人たちをおさえつけていました。ガマで治療していると、外から爆弾が投げこまれ、多くの人々が亡くなりました。とても過酷な環境ですごくつらかったと思います。

国語で「小さな労働者」という文章を読んで学んだことは、4歳、5歳の小さな子どもたちが労働環境が危険で不健康なところで、働いていたことです。

小さな子どもたちは、早朝3時になる笛の音で目を覚まし、一日中働きます。毎日毎日同じことをしていて、中学2年生の自分でも無理だと思う仕事を、4歳、5歳の小さな子どもたちがあたりまえのようにしていて、すごいなと思いました。

自分が4歳、5歳のときは、毎日保育園にかよって、歌を歌ったり、昼寝をしたりしてすごしていたので、あまりにも生活が違いすぎるなと思いました。

今の私の生活は、朝起きたら、朝ごはんが作られていて、学校に行く、友だちと勉強することができて、クラブ活動にいくとチームメイトとバスケができて、家に帰ると家族がいる……というような生活です。もちろん、働くことはありません。これが、今の時代の普通な子どもの生活のしかただと思います。

もし、自分が戦争をしている時に、中学生だったら、4歳、5歳の時に、働かなくてはいけなかったら、と想像することもできません。

今では、児童福祉法がつくられ、「午後10時～午前5時まではいけない。」というような法律があります。これによって、子どもが働くことは少なくなりました。

自分の生活をあたりまえだと思わずに、少し考えてみようと思いました。

みんな同じ

城南中学校二年



私は、ある小説を読みました。その小説はある障害を持った女子高生の話です。

その人は脊髄性筋萎縮症（せきずいせいきんいしゅくしょう）という筋力が弱くなる障害を持っていました。自分の足では歩けないので車イスに乗っていました。話しの中では、車イスではやりたいこともできなかったり、街へ行けばいろんな人が彼女を見

てはヒソヒソと何かを話していたり、そういったことなどが書かれていました。

私たちも、ジロジロと見られてはいやだと思います。それと同じで車イスに乗っている方もジロジロ見られるのはいやだと思います。車イスに乗っているからといって、自分たちとは違うと思うのはまちがいだと私はその本を読んで思いました。障害を持っている方だって心はあるのです。特に障害を持っている方は、私たちにとっては普通の言葉や行動でも、きずいたりする方もいると思います。だから私は、自分だけでも、障害を持った方への見方を変えようとしています。

その方には、その方の苦しみがあるはずです。もし、その苦しみを私が少しでも消せるのなら、私はすぐうれしいです。

これを書くきっかけをつくってくれた本の登場人物がこう言いました。

「身体は病気でも、心は病気じゃない」

私はこの言葉を聞いてたしかにその通りだと思います。身体の原因はきかなくても、心は私たちと同じなんだとあらためて思いました。

でも、やっぱり出来ないことは障害を持った方もそうですが、私たちにだってあります。だからこそ、「支え合う」という言葉があるのだと思います。

でも、「そんなのは思っているだけ」と思う人もいると思います。単なるきれいな事だと。たしかに人は、ただ言ってるだけで、それを実際にやる人はそうそういません。でも、言った事をいっしょうけんめい実現させようとしている人もいるかもしれません。私はそんな人になりたいし、みなさんにもそんな人になってほしいという思いがあります。

たとえどんなに難しいことでも、やらなければ何も分かりませ

ん。だから、人と人が教え合えば、きっと分らなかったことが分ってきたり、見えなかったことが見えるようになるかもしれない。

「障害があるからしかたがない」というのはまちがっていると思います。障害を持つていても、悪い時は叱り、うれしい時はいっしょに喜ぶ。これがあたりまえなんだと私は思います。

どんなに自分たちと違っていても、同じ人間、そして同じ時間を過ごしている仲間なんです。

そう考えると、みんな同じ生き物なんです。なぜ差別などということが起きるのが私は分かりません。もし、自分がやっていることがまちがっていると感じたら、何を言われても、正しい方向に向かって下さい。それが私の願いです。

「おたく」の人権

近畿大学附属新宮中学校二年



みなさんは「おたく」といえばどういうイメージを持っていますか。

あるアンケート調査でこのような結果が出ました。「好きなことに夢中になれる。ひとつのことに詳しい。極めている。」などポジティブな意見でした。しかし、「暗い。キモい。ダサイ。怖い。引きこもり。」などネガティブな意見も出ました。どちらかというと「おたく」は悪いイメージの方が大きいのでしょうか。

私はインターネットである言葉を見つけました。それは、「おたく差別」です。「おたく差別」とは、現代社会においてアニメ・

漫画・ゲーム・ロリコンなどの様々な「普通ではない」とみなされる趣味、若者文化に興味を持つ、いわゆる「おたく」と呼ばれる人々に対する差別のことです。「おたく差別」の歴史は一九八三年、ある人物が誌上のコラムで「おたく族」を紹介したのを機に、おたくの概念が知られるようになりました。作者の表現は否定的でからかうようなものでしたが、SFファンやアニメファンは「おたく」を自認するようになりました。当時の日本社会では、「おたく」に対して軽蔑する感情があり、「おたくは暗い。社交性がない。」という印象があり、そういう人たちも指して「おたく」と呼ぶことがありました。「おたく」は多様な趣味を持つ人々の総称となりましたが、一九八〇年代を通じて一括りに扱われました。

一九八八年から一年の間に東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件が起こりました。マスコミは犯人の異常性と趣味を結びつけて人々の関心を強くひくように取り上げ、全国に報道されました。犯人はビデオテープ、漫画、雑誌などを多数収集していましたが、その中にあったホラー物やロリコン物がことさら取り上げられ、事件と関連付けて報道されました。多くの人々はこの事件の報道を通じて「おたく」を理解したので、「おたく」変質者、犯罪者予備軍」といった認識が普及するようになりました。この時期、「おたく」という言葉は放送問題用語とされ、テレビ放送で使えない言葉でした。一九九〇年代には「おたく」変質者、犯罪者予備軍」とみなす論調がある一方で日本国外でのおたく趣味に関する情報や、著名なおたくによる情報発信により、「おたく」への悪い印象は薄れましたが、大学生を対象に行われた調査によると、おたくへの印象は、まだまだ否定的な意見が多かったそうです。近年では「おたく」に対する見方は徐々に見直され大学生を対象に行われた調査でも受容される傾向があるものの、事件の

犯人が、おたく又はアニメ好きと見なされると、メディアでは犯人の趣味が強調して取り上げられるといったことも多々あります。その原因として、「おたくを差別する分には反対する人が少ない」からです。しかし、私は「おたく」賢い、一つの分野に対してとても詳しい。」という良い意味だと思います。それに、マスコミも「おたく」は悪い人と決めつけず良いところもたくさんあるということを送してほしいです。そしたら、視聴者も「おたく」を良い意味でとらえてくれるかもしれません。おたくの誰もが悪い人じゃありません。実際に私もアニメや漫画が大好きです。だから、いつも友達とアニメのことを話しています。しかし、周りの友達に、「気持ち悪い」とか、たまに言われたりして傷つきます。一つのことと夢中になれるのはとても良い事だし、楽しみがあるのは、ないのと違って毎日が楽しく見えると思います。だから一人ひとりがその人の個性を良いところとして尊重してほしいです。そして「おたく」を差別しない社会になってくれると、とても嬉しいですよ。

友達

熊野川中学校二年



僕には、県外に友達がいる。その友達は学校でいじめられているようだ。その子は学校もあまり通っていないらしい。僕は、その子と親しくしていて、小学校の時はよく二人で自転車で出かけた。

しかし、中学生になってから、クラブや習い事で忙しくなり、なかなか会うことができなくなった。

親同士は会うことがあって、聞いた話ではその子は登校拒否をしているらしい。小学校の時は、いつもにこにこして元気に友達だった。そんな子だったのに、今はいじめられて登校拒否になっているなんて、つらく思う。どうしていじめられたのだろう。どうしていじめられるのだろう。その友達は、学校に行けずどんな思いで毎日を過ごしているのだろう。暴力のいじめ、言葉のいじめ、いじめる側は軽い気持ちでしたのかもしれないが、僕の友達はきつと深く傷ついているだろう。

僕は、暴力はいけないと思うし、言葉の暴力もいけないことだと思う。言葉はすぐ難しい。だから、大事に使わなければならないと思う。僕も言葉に気をつけなければならないと思う。僕には妹がいる。ある日、僕がイライラしているときに、妹がバタバタ走り回ったりしていて、我慢はするのだけれど、腹が立ち、「うるさい、どっか行け、うっとうしい。」

と言ってしまった。すると、妹は驚いて、自分の部屋に行ってしまった。僕はイライラしてついつい妹にあたってしまったのだ。今思うと、妹だったからこれで済んだのかもしれないが、それが友達だったら、大変なことになっていたかもしれない。もしかしたら、その友達もそんな感じだったのかもしれない。だから、僕は言葉は大事に使い、友達は大事にしなければならないと思う。僕はその友達に何もしてやれず、電話で、

「また遊ぼう。泊まりにも来いよ。」

としか言ってやれなかった。そう言ってから今日までまだ会えていないが、今度会った時には、小学生の頃のように、普通に接してあげたいと思う。

命の大切さ

高田中学校二年



私は、現在、戦争している国が何ヶ国あるのか気になり調べてみました。すると、百九十五ヶ国中、四十六ヶ国もの国が戦争を行っていました。その内、二十五ヶ国は、国同士での戦争、あとの二十一ヶ国は内戦だそうです。私は、「今、戦争をしている国って二十ヶ国くらいなのかな?」と思っていたので、その二倍もあって驚きました。なぜ、そんなに戦争をするのか分かりません。ですが、七十年前まで日本も戦争する国でした。

今、日本はとても平和で、戦争をしない国と憲法でも決まっています。しかし、今、戦争ができる国へと変わっていきこうとしています。もちろん、こっちから戦争をしに行くのではなく、攻め込まれたら戦ってもいいということなので、戦争が必ず起こるというわけではないのですが、もし攻め込まれた時、日本がやり返してしまったら、戦争が起こってしまうということです。今すぐではなくとも、十年、二十年、私たちの子どもや孫の時代には戦争が起こってしまうかもしれないということになります。また、七十年前と同じ過ちを犯すことになるかもしれません。そうなるとしたら、私は、やはりこの憲法を変えてしまうのはどうなのかと思います。

世界中では、今もどこかで戦争をしている国があるのでしょ。テレビや新聞で戦争のことをしていると、「戦争をして何か得ることがあるの?」と疑問に思います。ですが、世界では戦争をしてもうかる人もいらっしゃるのです。八千三百十億ドル、この金額は、全世界の軍事費合計金額です。日本円で考えると八十三兆

一千億にもなります。戦争に関わってお金もうけできる人もいます。です。そういう人達は、少なからず戦争が起こるのを待っているかもしれません。しかし、私はこんなことでお金もうけをしても嬉しくないだろうと思います。八十三兆一千億円という金額と一つの命を比べてどちらの方が重いでしょう? 私は、断然、一つの命だと思います。お金もうけのために、戦争を起こすなんて絶対におかしいと思います。

世界中には、今核兵器をつくっている国が少なからずあるでしょう。また、殺し合いはしなくても、スパイが情報を盗んだり、破壊工作をしたり、正式な外交ルートで恫喝をしたりすることも戦争というそうです。

私は、国同士でちゃんと向き合って話し合いをすることはできないのかなと思います。スパイを送ったりせずに、情報を共有したりすることはできないのだろうか。また、核兵器をつくったりする必要もないと思います。兵器を持っていたりしたら、どこかの国が攻めてきたらやり返すことができます。まして、核兵器なんかを持っていたら一つの国を丸ごと無くならないことだってできます。そんなこととしてしまったら戦争で終わらないかもしれません。兵器なんて必要ありません。話し合いで解決できたら、世界中の国が平和になれると思います。戦争がなくなってくれたら、世界中の人々の笑顔が増えると思います。そうなってくれるといいなと思います。ですが、思っているだけでは何も起こりません。私たちが平和をつくっていく、努力をすることが大切なのではないでしょうか。

「いじめ」という言葉

近畿大学附属新宮中学校二年



「いじめ。」この言葉は今の社会や世の中にありふれた言葉であり、聞き慣れた言葉。私は今回このありふれた言葉の実態について考えていこうと思います。

私がいじめについて考えようと思ったきっかけは、よくニュースなどでいじめでの自殺などが報道されているからです。また、私はLINEやtwitterをしていないのでSNS中ではどんないじめがあつてどうやって解決していけばいいのだろうと疑問に思ったからです。

スクールカースト制度、最近、ドラマなどでもよく再現されたりしています。キャラで自分の立場が決まり、立場が高い人ほど下の人たちを支配し、コントロールする。また、カーストの低い子は高くなりたいと思い、嘘などをついたり自分を偽ってカーストの高いグループに入ろうとします。そして、仮にカーストの高いグループに入れたとしてもそこではパシリになったり利用されるだけです。これらは私は立派ないじめだと思っています。そしていじめだけではなく人の権利も奪っていると思います。なぜならカーストが低い子達の学校の楽しさや自由を奪っていると思うからです。誰にでも学校生活を楽しんだりする権利はあると思います。が、しかしそれがカーストの上の子達から奪われている。それが現代の学校の実態です。私たちはそれを阻止しなければなりません。

そうするには学校からの理解や協力が必要不可欠です。どうか学校自体がしっかりしていないと解決というところまでいくこ

とは不可能だと思います。今の世の中は学校からいじめが発覚すると悪いイメージができ、学校側はその悪いイメージができるのが嫌な為にいじめを認めたり、見つけたりしようとしません。だから、私はその事から改善していかないと駄目だと思います。そしていじめが発覚すると悪いイメージを持つ社会の中の私たちも意識を変えていかなければいけないと思います。

また、今の社会ではいじめの手段としてSNS（LINEやtwitter）が挙げられます。これらは携帯電話やスマートフォンを持つことができる人は誰でも容易に利用することができ、いじめにも利用することができ、何事も便利になった時代だからこそ起きる一つの一じめの要因だと思います。また、これらを使いたいじめの例としてLINEのグループで一人の子を攻撃する、twitterでいじめのターゲットの悪口を書く、などということが実際に行われているいじめの真実です。これらは保護者や教師が発見しにくかったりします。そのため、私はこれらのようなSNSを使いたいじめがどんどん増えてきているのかなと思います。

そして、私たちもいじめが起きないように環境をつくったり、いじめられている子が相談をしにこられるような環境をつくっていかなければいけないと思います。いじめられている子も相談などをしっかりとして逃げるだけでなく、いじめに戦っていかないといけないと思います。しかし、それはとても辛いことで報われない時もあると思います。それでも、いじめた側の人たちは相手にしたひどいことは必ず自分に返ってきます。また、いじめで命を絶つということは絶対にあつてはならないことだと思います。強く生きていけばきつといつかはそこから抜け出せることができると思います。そして私はいじめられている子のどんな小さなSOSにも気づいてあげられるような人になりたいと思います。

さくらんぼの木

光洋中学校三年



おじいちゃんとの記憶が刻まれ始めたのは、四歳ぐらいの頃からだろう。いつもおいしい野菜や米を作ってくれる。運動会を見に来てくれる。毎年年賀状やお年玉をくれる。遊びに行ったらいつも笑顔で迎えてくれる。

そんな優しくて元気なおじいちゃんが、今年の春お腹が痛いと言いました。何度検査しても、おじいちゃんの病気は何なのか分かりませんでした。私がお見舞いに行った時、おじいちゃん

は、「あんたも半ズボンらはくようになったんやのう。」

と笑いながら私の成長を喜んでくれていました。元気そうだったので少し安心しました。「すぐ元気になって退院して元の生活に戻れるだろう。」まさかこれがおじいちゃんと会う最後の日になるとは思ってもいませんでした。

数日後、おじいちゃんの病気を突き止めるために、和歌山市にある大きな病院に行きました。後日、私はおじいちゃんの腹痛の正体を知らされました。それは、聞きたくなかった「ガン」でした。おじいちゃんの胆管にガンができていたのです。「あんなに健康なおじいちゃんがガン!」とびつくりして、残念な気持ちでいっぱいでした。手術をしないという選択を選び、おじいちゃんに残りの人生を家で過ごすことになりました。

それからおじいちゃんの病状は悪化するばかりでした。私は「お見舞いに行きたいなあ。」と思いながらも、テスト・クラブ・大会でなかなか行けませんでした。おじいちゃんのガンの進行は

とてもはやく、六月の中頃に入院することになりました。

私は六月の初めにテニスの県大会に行きました。初めての県大会はとても楽しかったし、いい経験になりました。新宮に帰ってきて、迎えに来てくれるお母さんを見てびつくりしました。お母さんが、喪服を着ていたからです。

「その格好でしたん。」

「じいちゃんが昨日の朝、亡くなったんや。」

「えっ。」

その時、初めておじいちゃんが亡くなったことを知らされました。私達はすぐにお通夜へ向かいました。

「じいちゃんがんばったんやで。朝、自分から救急車呼んでつてゆうて、救急車が到着するまでしゃべれやったけど救急車の中に入ってから安心したんか、息引き取ったんやつて。」

車の中で、そんな話をしてくれました。おじいちゃんは、死ぬ前日も、洗濯物を畳んでいたそうです。それはいつものようにきれいに畳めていなかったそうです。おじいちゃんは、しんどくても腰が悪いおばあちゃんの負担を軽くするために、お手伝いしたいという気持ちだったのでしょうか。それとも病気をしても日常生活を大切にしたいという気持ちだったのでしょうか。おじいちゃんに、どんなにしんどくてもつらくても、やればできるということを教えられました。

斎場に着いて、おじいちゃんに会いました。静かに気持ち良く眠っているようでした。私は安心しました。「じいちゃん、痛みとの戦いお疲れ様、もう痛くないよね。」

私はおじいちゃんがガンと知ってから、話す機会がありませんでした。それが少し心残りです。県大会のことも話せませんでした。県大会に行けることを一番喜んでくれたのはおじいちゃんだったので、天国で応援してくれていたと思います。

じいちゃんへ。じいちゃんは、人生の大先輩です。戦争のことを教えてくれたり、自由研究も手伝ってくれました。じいちゃんの米や野菜、そしてすいかは最高でした。店で買うより新鮮でおいしかったです。私がさくらんぼが好きと言ったら、さくらんぼの木を植えてくれましたね。私にとってさくらんぼの木はじいちゃんへの優しさの象徴です。これから春になってさくらんぼの実がなると、じいちゃんを思い出すことになるでしょう。感謝しながら摘み取りたいと思います。じいちゃんの家遊びに行った日は、とても楽しかったです。私の大切な思い出です。

今まで本当に、ありがとう。

LGBTの人たち

緑丘中学校三年



私は人権についてのDVDを見て、はじめて「LGBT」について考えました。最近テレビなどでよく「性同一性障害」のタレントさんを見ます。皆さん楽しそうですが、あの様になるまでには、いろいろなかつとうや悩みがあったと思います。また、周りの人に言えないまま、毎日苦しい思いをして生きている人もきつと多いと思います。いつも自分を押し殺して生きていくのは大変だけど、だからといってありのまままで生活するのも、周りの反応が怖い。皆さんそんな思いでいるのだと思います。実際に私も例えば女の格好をしている男の人をみたら、どうしても意識してしまいます。おそらく多くの人がそうだと思います。私はいまのような状況が、性同一障害やLGBTの人たちをより苦しめていると思っています。でも、それは誰が悪いというわけではなくて、普

段の生活の中でそういうものに接する機会がないからです。私もテレビやDVDを見るまでは、よく知りませんでした。きっとほとんどの人があまり詳しくは知らないのではないかと思います。では、どうしたらたくさんの人に性同一性障害やLGBTについて知ってもらうことができるのか、考えました。最初にも書きましたが、テレビにでているタレントさんたちは、今やほんとうに多くなりました。私はこういうタレントさんたちが世間にLGBTなどについて伝える大きな役割を果たしていると思います。だから、これからは幅広い分野で活躍してほしいです。また、アメリカやその他の地域では、男の人同士、女の人同士の結婚が認められています。日本では認められていません。この結婚が認められるようになれば、ほんの少しかもしれないですが、LGBTの人達も毎日を過ごしやすいものではないかと思っています。

DVDではLGBTは約二十人に一人だといわれています。だいたい左利きと同じくらいだそうです。昔は左利きも差別されていましたが、今では普通です。私はLGBTの人たちも特別視されず、普通に、生活出来る世の中はおそろい早く来ると思っています。人間の本质は心です。心は男性、もしくは女性なのに規則だからという理由で外見に合った制服でなきゃだめだなんていう考えは間違っていると、私は思います。全ての人が自分らしく生きている世の中に、自分は何をすれば力になれるのか考えながら、一日でもはやくなるのを願っています。

戦争

城南中学校三年



今、日本は戦争や争いがなく、とても平和です。しかし、今から70年前は、日本でも戦争が起こりたくさんの犠牲者が出ました。沖縄では、唯一地上戦が行われ、戦い続けた兵士と戦争に無関係な住民がアメリカ兵により殺されていきました。住民の中には、日本軍にわたされ手榴弾によって死んでしまう人もいました。なぜこのように犠牲者が増えていったのでしょうか。

それは、日本軍司令官の「最後の兵まで戦え」という命令があったからです。この「最後の兵まで戦え」という言葉は、日本は絶対に勝つ、負けないといった気持ちがあったからだと思います。戦っていたのは兵だけでなく、住民も必死に戦い続けました。住民は、日本軍に食料をうばわれたり、安全な塚を追い出され、砲弾のふりそそぐ中をさまよったりしました。

私は、学校で戦争のことについてたくさん学びました。その中で一番印象に残っているのが、神風特攻隊です。私は「永遠の0」を見ました。永遠の0は特攻隊の映画です。その映画を見ていると、自分の命を捨ててまで、国のために戦っている人達は、本当にすごいと思いました。口では、「国のために命を捨てる。」など言っているけど、心の中はどこかでは死にたくないと思っていたと思います。この特攻隊の人達は、敵軍の船へ突撃する前、どんな気持ちでいたのでしょうか。怖い、お国のために死ねてうれしい、家族が愛しいなどたくさん感情があったと思います。しかし、やっぱりその中でも一番多かった感情は、怖くて悲しいという気持ちだと思います。自分の飛行機がこのまま突撃すれば確実に死

んでしまう。そうなってしまおうと、自分が帰ってくるのを待ってくれている家族や恋人が悲しんでしまう。だが「お国のために死ねる」ということはすばらしいことだ、などと思うことが本当にたくさんあったはずですよ。死ぬことが怖く、特攻隊に行きたくなかった人もいたと思います。それでも国を守るため、戦争に勝つために、自分の命を捨ててまで戦い続けたのでしょ。今では、特攻隊は、戦争の悲惨さをおしえてくれたものであり、日本の誇りでもあります。

人々はなぜ、戦争というものをしてしまったのでしょうか。国同士の勝ち負けをこんな無関係な住民や兵士をたくさん殺してしまわずに、ちがうかたちで勝ち負けを決めることはできなかったのでしょうか。

しかし、今、こんなに平和な日本があるのは、70年前に国のために必死に戦ってくれた人達がいたおかげだと思います。これから、こんなに苦しく、悲しい争いは二度としないよう、人々が支え合い、はげまし合っていかないとけないと思います。

私達は、これからも戦争で亡くなってしまう人々を忘れずに、平和な生活をおくっていききたいと思います。



ドナーカード

熊野川中学校三年



ドナーカード。正式名称は「臓器提供意思表示カード」と称されるこのカードの存在をあなたは知っているだろうか。私自身、臓器移植はできることは知っていたものの、その方法やドナーカードというものが存在するということは知らなかった。

「臓器提供意思表示カード」という名からイメージすることが出来るかもしれないが、私はこの名を聞いて、ドナーカードとは体のどこかに問題があり病気を患っていて、もう長くは生きることのできなくなってしまう人が、自分が死んでしまった後にも自分の中のまだ健康な臓器を困っている人に提供してほしいという意思を示したものだと思っていた。しかし、私のイメージは少し足りないところがあった。それは、臓器を提供するのは病気を患っている人に限らず、何の病気もない健康な人でも、もしものことがあり、脳死または心臓停止で予期せぬ死を迎えてしまった場合でも、臓器提供ができるということだ。

ドナーカードは、各地の役場や保健所、コンビニや銀行にまで設置されているそう。また、二千十年十月十一日以降に発行された運転免許証の裏面に臓器提供意思を記す欄が設けられているそうなので、私は母のものをを見せてもらった。そこには、一から三までの番号とその内容がそれぞれ書かれていて、その中から自分の意思となるものを選ぶということだった。その内容というのが、脳死・心臓停止のいずれでも提供、心臓停止の死後のみ提供、もう一つは提供しないという意思だった。さらに、提供しない以外を選んだ人でも提供したくないという臓器があれば、×

を付けるということで、（心臓・肺・肝臓・腎臓・すい臓・小腸・眼球）といった選択肢があった。これらを記入するかどうかは自由だと書かれていて、私自身は強制ではなく任意で行えることが良いと思った。そして、提供したくない臓器の選択肢の中に眼球があったことに驚いた。それ以上に私が驚いたのは、母が、「そう言えば、保険証の裏にもあったかな。」

と言って出てきてくれたものだった。持ってきてくれた私の保険証を見てみると、裏には運転免許証で見たのと同じ臓器提供の意思を示すためのものが書かれていて、何よりもこんなに身近にあったことに驚いた。

ドナーカードの普及率は年々少しずつ増え続けているが、アメリカなどの他国と比べるとまだまだ低い。だが、それを必要としなければならぬ人々もまた増え続けている。医療技術がどんどん進化してきているとはいっても、やはりそれでは追いつけないほどの悩みを持った人がいるんだと思った。

たとえ、自分一人が臓器提供をしたい、他の人の役に立ててほしいと望んでも、家族の同意がなければ臓器提供は行えないそう。だからこそ、家族同士で十分話し合い、自分の気持ちを伝えることが大切だということだ。

世界に比べてみると、まだまだ日本での移植は少ない。だから、今も色々な病と闘っていて、臓器提供を望んでいる人たちのためにも、まずはドナーカードの存在を多くの人に知ってほしいと思った。